
現遊びの夢幻

矢羽 彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現遊びの夢幻

【Zコード】

Z7551

【作者名】

矢羽 彩

【あらすじ】

「誠也の声、前から欲しかったのですよ」Jとの企てを考え、始まりを起こしたのは彼の友人であり長年の幼馴染である南野友留であった。なんと友留は声マニアであったのか!? 彼に声を取られた誠也は何も話すことができなくなってしまった! どうしようか。とにかく不便なことこの上ない。日常に満足していた平凡な誠也は声を取り戻すために非日常に遭遇する。

抜き取られた声（前書き）

昔書いた小説をひょいひょい手直しました。
軽い内容なので気楽にお読みただけると思こます。

抜き取られた声

「あーめりめりや、よかつた。南野に借りたこのCD」

やつぱりあいつは音楽のセンスがいい。
つていうか俺の趣味をよくわかっている上でのチョイスがうまいな。

城山誠也は、同級生であり幼馴染である南野に先日貸してもらつた
音楽CDを聞き終えると満足気にそいつだった。

「次のCDいくか

誠也は自分の部屋で、先ほどまで聴くために入れていたCDを『テッキから取り出す。

そして手に持っていた、もう一枚のCDをセットすると再生ボタン
を押した。

されどこくら待てども、何度再生ボタンを押しても、一向に曲は流れ
てこない。

「あつれー？ おかしいな

怪訝に思いながらも、もつじばらく待つてみる。
だが、流れてくるはずの音は機械から全く出でこない。
雑音すら聞こえてこなかつた。

接触でも悪いのだろつか、と思つた誠也は
仕方なくCDを一度機械から取り出してから、もう一度ちゃんとセ
ットし直そうと思つて立ち上がる。
そのとま。

「誠也　『」飯よー』」

階下から母親がのんびりとした声で自分を呼ぶ。
それに対して誠也はいつものように「今行くー」と階下にまで聞こえるように多少大きな声で返答しようとしました。
けれど。

(あれ？　おかしいな)

声が出ない。

しかも咽喉がふるえる感じもしない。

風邪の時などに咽喉が痛くても、声を出せないと声帯が振動していることがわかるところだ。

不思議に思つて首を傾げながらも明確なことは分からぬ。とりあえず夕飯のため、階段を下りていへ。

「あんた風邪でも引いたの？」

階下に降りて、食卓に着くなり誠也の顔を見ると開口一番に母親はそう言つた。

先ほどの呼びかけにいつもはきちんとある返答がなかつたので誠也に元気がないのだと母親は思つたようだつた。
誠也はどんなに不機嫌でも無視はしないよつこと育てられたので言葉はちゃんと返す主義だ。

それなのに家について答えがないところは異常でも悪いのだとしか考えられなかつたのだ。

(声が出ないんだよ)

ぱくぱくと大きく口を動かして、ぢりじか口朴で声が出ないことを母親に伝えようと試みる。

誠也の方を見つめるもどり、いつた言葉を発しあつとしたのかが解せなかつた母親は不思議そうな表情を浮かべる。

しかし、なんとなく行動の意味はわかつたので恐らへは咽喉の調子が悪いのだろうと察するとすぐに普段通りに床つた。

さほど具合が悪いようでもないし、ただ少し咽喉が痛いくらいなら心配なかろい、と。

「何を言つてこらのかまではわかんないわよ。必要なら紙巾でも書いてちょうだい。

まあ今はいいわ、やつと食べましょ」

せつかくの温かい料理が冷めちゃうわ。

料理の段取りを大事にする母親は、いつも食卓に並ぶ品の温度を絶妙なタイミングになるように心掛けていた。

「きつと風邪かなんかで喉でも痛めたのでしょ。食べたら寝ていいっしゃい」

と母は言つた。

母親の「寝れば治るわよ」といつた言葉に誠也はそつかもな、と思いつつもさつきまで普通に出でこた声が突然出なくなるなんておかしなものだ、と思つた。

一体全体どうなつてゐるのだろうか。

事故や熱、衝撃的なことによつて声が出なくなるところのせいでママや小説で知つてゐるけれども

何も特別な出来事も起じない、いきなり声が出なくなるなんてことあるのか。

しかも妙なことに、ただ声が出なくなつたところとは違つ感じがする。

何と書いたらいいのだろうか。自分でもよくわからないけれども、声をあげると奪われたような・・・。

箸を口に運びながら食事をしていた誠也が出なくなつた声のことを考えてみると、

かたん

というかすかな音が一階の方からしたことに気がついた。

誠也は聴覚が普通の人よりは若干敏感で小さな音も聞き逃さない。その音が一階のどこからしてこるのか、すぐにわかった。

(浴室からだー)

「飯をかきこむのもそこそこ、洗面所も、と一礼して食器をシンクにつけると急いで、けれど足音をなるべく立てないようにして誠也は一階へと上がつていった。

抜き取られた声（後書き）

ゆるーっと続きます。

突然消失した声の行方

自室のドアを開けて部屋の明かりをつけたと、そこにはやはり侵入者の姿があった。

しかし、それは空き巣でもなんでもなく誠也の知っている人物だった。

「ああ、見つかってしまったのですね」

同じ年で幼馴染のくせに敬語で話すそいつは、先ほどまで誠也が聴いていたCDを貸してくれた張本人だった。

名を南野友留という。

(み、南野！？)

言葉を発しようとすると、またもや口ぱく状態のまま。声は出でこよびとしない。

これでは友留にも誠也の言いたいことが伝わらないだらう、と思つきや

「あーはいはい。それで、わかりますよ」とあつさり理解された。

母よりも長年の腐れ縁の幼馴染の方が誠也に対して理解があるのでううか。

幸か不幸かは知らぬが、誠也の声が出なくなつたことによる物言わぬ心の内の戸惑いまで伝わった気がする。

母には通じなかつたといつた。

「声が出ないんでしょう?」

当たり前のことのように友留は誠也にそう問いかける。

(「そうなんだよ。急にさあ。なんでだろ? そういうえばお前なんでこんな時間に? しかも」) うそと俺の部屋に忍び込んでなんているわけ?)

長々とした言葉を友留は誠也の口元をじつと見つめて読み取った。

そういえば、と誠也は思つ。

友留とのつきあいは長いが自分の部屋にやつてくるのは珍しい。しかも前触れもなしに突然とは。

今までになかったことだ。

いつたい何の用で訪れたのだろうか。

止めどない疑問を思い浮かべる誠也を友留の声が現実に引き戻す。

「声が出ないのはこれのせいですよ」

友留は自分が誠也にかした一枚のCDのうちの一枚 曲が流れなかつたほうのCDだ を掲げた。

そして誠也が口にした次の質問へ。

友留は静かに答える。

「それで僕がここにきたのはですね、これを回収したかつたからですよ」

自分が手にしたCDへ目線を向けると、それを懐にしまつ。

(へ?)

口をぽかんと開けて阿呆面をさらした誠也に友留は淡々と言葉を続けた。

「君の声、前から欲しかったのですよ」

(はああああ！？)

友留が何を言いたいのか、何を言っているのか。わけがわからない。

脳が理解を拒む言葉を聞こえた。

混乱状態になつている誠也は意味不明だ、といつのを顔いつぱいで表す。

「ふふ。実はですね、このCDに誠也、君の声が封じられているのですよ。

いや吸収されたといつぼうが正しいかな。うーん」

誠也を放つておいて、いきなり一人思考に沈む友留に憮然としつつも、なんだか自分の手には負えなさそうな事態が起つていてどうだとうつすらと感じる。

困つた時はシミコレーшибんとばかりに

誠也は自分の頭をフル回転させて今後、友留に何をいわれても大丈夫なように

また反論できるようにその状況を想定する姿勢に入る。

しかし、その努力は空しく徒労に終わる。

「あ、それでは、これで今日の用事は終わったので失礼します」

唐突に思考を打ち切り、そう言つなり窓から出て行こうとした友留の服の袖を逃がしてなるものかと誠也は急いで掴んだ。

まだ正確な状況を把握していないまま出ていかれてたまるか。

頭は混乱していたが自分の声を取り戻すには友留をどうにかしなけ

ればならないところ」とは漠然と分かっていた。

窓枠に足をかけ、いざ踏み出そうとしていたところだつたのだが
急に後ろに引っ張られたため、友留の身体は前へとつんのめつた。

バランスを崩して倒れそうになつたのをなんとか防ぐと身体を安定
させる。

そして文句を言つたために友留は背後を振り返つた。

「おっと。何をするのですか！危ないでしようつていうか今日着て
いるこのマントは先日の雨でもう代わりがないんですから袖が破け
たらどうするんですか」

代えのきかない衣を破かれてはかなないと友留は急いでマントに
かかつた誠也の手をはずそうと試みる。
その慌てようこしょうがないなと思い、誠也は手を離してやること
にした。

しかし代わりに今度は裾を足で踏みつけたのだった。

突然消失した声の行方（後書き）

変人、友留の登場です。

幼馴染の一面

「なんですか？」

手が外された瞬間、窓の外へと動いたとして、結局はマントの裾を踏みつけられる。

その一連の流れを目にした友留は、仕方なきうため息を一つこぼした。

諦めて、この際とっとと済ますしかないと見てとつて、誠也に聞いて向ける。

用件をひとつひと皿つてくれ、とじばらくは背中を向けたまま無言で促す。

けれども、誠也は早くトシズラしようとしている友留をそのまま行かせてやるほど親切ではないし、間抜けでもない。

第一、どうやら話を聞いて大雑把に推測した結果、

現状の誠也が困っている問題の原因を持っているのは友留なのだ。

止める権利はあっても逃がしてやる義理は誠也には、ない。

友留の目がこちらに向いた、と思つたときに誠也は話しかけた。
くちばくで、だが。

(お前、なんで俺の声なんか欲しいわけ? つていうか、どうせつて人の声帯を取るんだっての)

胸中でまさか単に声マニアとか言わないよなー?
とか誠也は考えてみる。

答えを得んがために必死となつてゐる誠也に目を留めつつも、その瞳には何も感情が映らない。

友留はただ言葉を発するのみ。

「あー誠也には言つていなかつたのですが。実はですね、僕は魔術具販売人なんですよ。それである特殊な実験用の生物が今顧客から注文が入つていて」

(それとこれとどういう関係が)

耳にした言葉は普段はなじみがない得体のしれないものだった。さっぱりわからない。

特殊な生物の注文と誠也の声の関係性が思い当たらない。

だが困惑する誠也に、友留はいえいえ、と否定すると説明を続ける。

「大有りですよ。その特殊な生物を捕獲するのに必要なものがあります。

それが声、なんですかね、その生物が気に入る声質でなくてはならないのですよ」

もう条件がいくつもあって面倒くさいんですよねえ。

そうぶちぶち言つと友留は言つた。

「で、君の声がその生物の好みにピッたりんこだつたわけですよー…嬉々としてそう話す友留に誠也は先ほどまでの困惑はどうこじやつたのか。

従来の現実主義に戻つて冷静に、突つ込みを入れる。

(ピッたりんこつて何だ。お前それおかしい)

「「つるや」ですね、ノリですよノリ」

呆れたような、冷めたような誠也の田に友留は焦る」となく並ぶ。
むしろ冗談を解さない奴だな、的な雰囲気である。

それにしても誠也の声がその注文のなんたらかんたらにぴったりだ
なんて

一体いつそんなの調べたのだろうか。

友留とは普通に遊んでいたり、くだらない話をしているだけだった
のに。

おかしな行動なんて今の今まで一度の田にしたことはなかったよう
に思う。

それを考へると誠也は少し友留が怖くなつた。

誠也に隙なんでものは、いくらでもあるのだろう。

それを友留は利用して、作戦を練ればいいだけだったのか。
想像して一瞬、寒気がした。

今度からは友留には十分に気をつけなければ、と誠也は自分を戒め
る。

(つーか声返せよ)

不便な状況に慣れる気はない。

この状態を受け入れる気はわからぬのだ。
しかし聞こえるのは拒否の言葉。

「嫌ですよ」

即答だ。迷うそぶりすら見せやしない。
いい加減、疲れてきたぞ。

誠也は心の中で嘆息する。

「大事なお得意様なんですから、頑張らなくては」

誠也に声を返したら、他にその特殊な生物の好みの声をまた探さなければならぬ。

また万が一に見つからなければ、その注文を断らなければならぬのである。

他の同業者の店から取り寄せるのは主義に反するついでに、友留の店の信条である”なんでも自分で直接そろえて売る”という考え方の信用が落ちては困る。

逆にそもそもその注文を断つたりしたらその後、お得意様が去る可能性を生んでしまうことになる。

それは痛いので、友留も顧客の願いを叶えんがために踏ん張るしかなかった。

いまだかつて、そこまで熱心な幼馴染をみたことがなかった。

様々な思惑の中で自己の利を見出さんとする、商売気が満々の友留を田の前に対峙していた誠也は、呆れると同時に感心すらした。

まだ高校生のはずなのに、どうやらここつまもつとくに立派な商人なんだな。

なんてことを誠也は頭の片隅で思った。

#ルを残したまま（論議）

ぐだぐだです。

#を残したまま

けれども。

(だから。つて人の声を盗むんなよな。しかも無断でー。)

なんだか馬鹿馬鹿しいこの非現実なことも、どうでもいいようなことを少し口にすることによって、どうにかこうにか現実として受け止められるような心境に誠也はなつてきていた。

但し、このまま声を失うことを受け入れる気は全くないが。

「いいじゃですか。減るものじゃないですし？」

そこで言つた友留の発言はまるで誠也の心の声を拾つたかのようになり自然と会話の流れにあてはまる。

(なんで疑問系!？　いやちょっと待て、減るから。つうかなくな
るから)

不思議そうな顔をする友留に誠也は必死に言い募る。
何としても声を取り戻すために、ない知恵をしぼつて考える。

テストでもこんなに頑張ったことないぞ。

打開策は何かないのか！

今にも去る体勢を崩さないままの会話の中で、なんとか友留を引き止めるよつと、

試みるも時間を氣にして誠也の中で焦りは否心にも高まる。

とつあえず思いついた疑問を手当たり次第にぶつけみる。

(声とるひつたつて、せめて録音でいいだろ！？)

「何言つているんですか。そんなの駄目に決まつてゐるじゃないですか」

そいらへんにある一般のものとは違う魔術のためのものだ。特殊なものに使うのにそんな簡単なものでは効果が薄れて期待できない。

ただの物質と魔術の考え方も区別がつかない相手との話しさは労力を使う。

基本知識のない奴とやり取りするのは意味が通じあわないうえに多量の説明を必要とするので時間もかかるし面倒だ。

友留は苛々とした表情を浮かべる。

どうせ話しても理解できない相手にこれ以上時間を費やしたくはない。

そろそろ忍耐の限界地に達してしまってそうだ。

元来、自分は忍耐強い方であるが今は急ぎの用件があるので、もういいだらう。

「あーもうしつこですねえ。仕方がないです。この手は使いたくありませんでしたが」

そう言うなり懐から何かを取り出すと、友留はいきなりそれを誠也に投げた。

投げつけられたことにより、空を飛んだ物質は誠也の眼には一瞬だけた。

顔面に思いつきり当たり、グチャッと何かがぶつぶれる音がする。至近距離からの攻撃に不意を突かれた誠也は気が動転していた。

(なんだあー？ これは？？)

視界をふさがれ、思考は止まる。

「それじゃあ」

友留が逃げる！

そう思つて慌てるが、顔全体に何かがべつとりとついて重い。べたつきがすごい。

咄嗟につぶつてしまつた目は強固に閉じられ、誠也は開けることなどができない。

去り際に残された言葉は視界のきかない誠也への友留の親切か。しかし友留の発した声のおかげで去つてしまつたのだとわかつても、何もできない。

口惜しいままに、深呼吸をして冷静さを取り戻す。

とりあえず目の周りだけでも、と両手で顔を何度も拭う。数分かけて拭うと目を開けて、手のひらを見る。

するとそこには白い粉と液体の混じったものがあった。

なんだか、と思つた誠也は恐る恐るの表情を浮かべる。次いで、唇にも付着した白い粉を舌で思い切つてなめてみた。

(甘い…)

そういうえば友留はかなりの甘党だった。

つまりは

(あいつのおやつが何かだったのだろうな)

友留は常に自分用のお菓子を持ち歩いているのだ。

たまたま後で食べるはずで懐に入れておいた食べ物を他に適当なものが思いつかなかつたために使つたのだろう。

投げつけるには高度がなく、外傷にはなりえない。

おまけにやわらかなそれは、誠也に視界を覆うのに一役買つた。

そういうことだな、と誠也は推測した。

タオルで顔を拭くと、足元に砂糖の取れた丸いクッキーのようなものが転がっていたのを誠也は見つけた。

(あーこれか)

小さな粒サイズのクッキーをつまみ上げる。

砂糖を練りこんだずいぶんとやわらかな生地にクッキーのかけらをまぶしたようなお菓子だったようだ。

甘党なアイツ専用に調理されたものだろう。

(それにも困ったなー。どうしようか。あいつにとられた俺の声。結構不便だなー。手話なんか使えねえし。つか使えるても周りに通じないけどな。筆記はいちいち書くのが面倒くさいー)

声を失つてからまだ数時間しか経っていない。

なのに、すでに誠也はそのことに対する不便さを感じていた。

(いのまま明日学校行つたら、めっちゃしどそー)

想像するだけで疲れるのが田に浮かぶ。
いや、もう想像だけで疲労感が増していくよつだった。

ふとカレンダーに田をやると、翌日は休みであることがわかった。

(ふうん。なら明日の心配はないな。でも、どうせなら)

誠也はクローゼットから動きやすいそうな服を見繕つて取り出すと着替え、こっそりと家を出た。

玄関をからりと開けて、足を一步踏み出すと誠也は駆け出した。

#を残したまま（後書き）

いつも友達は私の田の井をやつを泣く泣くあせりあるじと云ふのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7551/>

現遊びの夢幻

2010年10月13日04時26分発行